

ぶろす

四季の会・ユーザーズ・サービス

337号

発行人 浅沼 邦夫

拝啓 早春の候、先生におかれましては益々御活躍のことと存じます。

人間は「感ずるということ」で、楽をしてきたんだ、と日経2/24のあすへの話題にこんなことが出ていました。ヒトは「営み」を自分の体の外へ委ねることで発達して来た不思議な生物だ。自分では歩かずにウマやゾウを歩かせて乗るようになり、数百年前からは機械の中で何かを燃やして走らせ、乗るようになった。記憶できない情報を何かに書き付けて残し、手指で足りない数を算盤で計算するようになり、パソコンをつくった。寒い時にも太らずに着膨れするし、食べ物もかむ前に煮たり焼いたりする。

イノベーションはヒトが生物として自己完結させていた営みを、1つずつ体の外に出して来た歴史なのかもしれない。何万年もかけ、ヒトは自分では何もなくなってきたのである。私たちは何をして何を失くなるのか。それを考えるのは今世紀のイノベーションを占うのと同じである。

このままだとヒトの仕事は「おいしい」とか「面白い」と感じるだけになる、と思うことがある。周囲で起こることの認識と評価。感覚だけがヒトの持ち場になるのかもしれない。

ところが最近、ヒトはその感覚さえ外に出そうとしている。単純な例が体重計だとしたら、極端な例が「がんマーカー」だと言えるだろう。痛いと感じてからでは遅いから、どこかにがん細胞ができたなら、ヒトよりも早く感じてしまおうと言うわけだ。

確かにこれもイノベーションである。ヒトよりも先に何かを感じ、それを明確に知らせることができたなら、感覚の代替に加え治療や予防にも役立つと、「情報薬」というコンセプトも登場している。

そこではたと気づいた。ヒトにはまだやるべきことがある。感じると同様に大切な仕事を、私たちはまだ抱えているのだ。夢を持って何か新しいことを思いつく。そうだ！私たちは人間だ！そこで考える。「仕

事と人生」がある。そこで「気と心と手」が大事。復帰へのイノベーションである。

新聞を読もう 社会の流れを知ろう

よく新聞を読むとき多くの人が、「残念な読み方」をしていると思われる。新聞の見出しだけに目を通したり、自分の関心のあるところしか読まなかったりしていると、自分の頭の中に残るのは、関心のある記事だけになってしまいます。お客様が経営者である会計事務所では、会社という言葉が「社会」という言葉の逆になっていることから分かるように、会社は社会の一部です。どんな会社でも、社会の流れに勝てる会社はありません。社会の流れを読む習慣を習得しましょう。

「社会の流れを知る」ことが何よりも重要です。新聞の読み方の最良の方法は、新聞の1面トップ記事を毎日読むことです。新聞の1面は新聞社が読者にもっとも知らせたい記事を選んでいきます。ですから、自分の関心があるうがなかろうが、社会の最大の関心事であるはずで、それを毎日読んでいくことが大切なのです。「これが社会の最大の関心事なんだ」と考えて、しっかり目を通す。これがビジネスマンの訓練だと思えばいいのです。

私は「日経」や「朝日」・「読売」等々を読んでいます。今朝の「日経」では、「ベア回答7割に、業績回復追い風」。多くの企業が業績回復に加えて、デフレ脱却に向けた政府の賃上げ要請にも応え、実質的な給料アップに踏み切る。「好循環につながる改革を」と、民間が力を発揮しやすくすることが大事のようです。

今朝の「朝日」では、「官製春闘ベアの波」「車・電機から外食まで大手続々」企業業績が回復基調をたどるなか、景気回復を後押しした安倍政権が賃上げを強く求め、企業が進めた。政権主導の「官製春闘」の色合いがにじんだ。

「読売」では、「東芝技術流出で逮捕状」「韓国企業に提供、容疑の日本人元技術者」東芝の主力製品であるNAND型フラッシュメモリーの研究データを、韓国企業に不正に渡したとして、警視庁が、不正競争防止法違反容疑で逮捕状を取ったことが、捜査関係者への取材でわかった。近く強制捜査に乗り出す。三大紙の一面でそれぞれ違っています。日経は経営・経済中心。朝日、読売は国民への考え方が違い、力の入れ方、「社会の関心事」が出ています。

日経3月12日には、「ヤマト一斉値上げ。脱デフレ、物流も」と。ヤマト運輸は法人顧客に対して一斉の運賃の引き上げを要請する。インターネット通販など大口顧客には契約見直しを打診し始めた。小売業がコストを吸収できなければ、消費者が負担する送料が上がる。宅配便市場の拡大にもかかわらず、競争が激しい法人向けの単価は下落が続いていた。業界最大手のヤマトが人件費や燃料費の高騰分を料金に反映することは、日本経済の「脱デフレ」の流れを象徴する重大な事件です。

日本国民の3分の1が 「花粉症」!?

日本人は、害のない花粉にまで“過剰反応”して発症している。3月はまだ風が冷たく、暖かい春の到来が待たれる。でも、暖かくなるのはよいが、花粉症持ちにとっては憂鬱な季節である。くしゃみ、鼻水、鼻詰まり、目のかゆみが花粉症の4大症状で、水のようなサラサラした鼻水と目のかゆみが出たら、ご用心。鼻風邪の場合は目のかゆみはないし、数日たつと鼻水は粘性が高くなり黄色や緑色に変わるから、見分けができる。

花粉症の患者は、急増の一途、予備軍も含めると今や日本国民の3分の1、3800万人もの患者がいるそうだ。一度罹ると、毎年悩まされることになるので、やっかいである。花粉に対するアレルギー反応が引き起こす症状で、そもそも人間の身体は、病原体などからの攻撃を守るために「免疫システム」が働いている。それが“過剰反応”してしまう。害の少ない花粉にまで防御反応をしてしまうのだ。

日本では花粉症の9割がスギ花粉だが、その発見者は東京医科歯科大の齋藤洋三医師。栃木県日光で診察を開始したところ、毎年、春になると、同じ症状を訴える人が多く、海外の文献などから花粉症に気付く。様々な植物の花粉の量を調べ、スギ花粉のピークと患者の多くなる時期とが重なることを、赴任の翌年の1964年に発見した。戦後の日本は生育の早いスギの植林を国策として進めた。スギは樹齢30年ほど経つと、花粉を大量に飛ばすようになる。76年、79年、82年には全国的に大量のスギ花粉が飛散し、それに比例して花粉症患者が増えていったのです。

花粉症が増えている原因の第1は花粉そのものが増えているからだが、第2は日本人の場合アレルギー体質の人が増えていることによるものだという。昭和30年代以前に生まれた人のうちアレルギー体質の人は40%なのに対し、30年代以降に生まれた人のそれは80%近いのだという。若い人は長期間、苦しまなくてはならない。(03年、東京・国立成育医療センター調査)。その理由に「衛生仮説」が唱えられている。

清潔な社会になって、乳幼児期に様々な細菌に触れることが少なくなった結果、体内の免疫バランスが崩れ、花粉症を発症する人が増えたとの仮説である(『病の起源2』NHK出版)。実際、家畜に触れあう機会の多いモンゴルの遊牧民は、現代でも日本人に比べ、花粉症などの発症率は5分の1だそうです。

気になる今春14年の花粉量だが、過去10年の飛散量平均の5~9割と少ない予想だ。といっても高濃度の地域も多いから油断は禁物です。

最後に、経済との関連だが、花粉症特需(薬やマスク代など)は639億円、一方、外出を控えるので1~3月の個人消費が7549億円減り、マイナス効果のほうが大きいのです。(第一生命経済研究所の試算)